

Title	メリトポリ古墳と「五兄弟塚」：戦後のソ連邦における二基のスキタイ時代の大墓の調査
Sub Title	Meritopol Barrow and "Five Brothers" Barrow : excavations of two chieftain's burials of the Scythian age in U.S.S.R.
Author	穴沢, 咏光(Anazawa, Wako)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.3 (1970. 12) ,p.111(505)- 121(515)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19701200-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メリトポリ古墳と「五兄弟塚」

―戦後のソ連邦における二墓のスキタイ時代の古墳の調査

十月革命以後のソビエト連邦黒海北岸地方でのスキタイ遺跡の調査は至って地道に行われ、主な発掘の対象は革命前に発掘されたような豊かな出土品の期待される大墓よりはむしろ中小のスキタイ墳墓やカメンスコ高城のような集落址であり、スキタイ文化の編年やスキタイ社会の構造、生産関係の諸問題の解明に研究の重点がおかれているようである。

しかしソ連の考古学者によって調査された数多くのスキタイ墳墓の中には、明らかに王墓または首長墓級と考えられる墳墓も決して絶無ではない。シンフェロポリ郊外ネアポリの末期スキタイの墓廟などその一例であろう。筆者がここに紹介する二つの墳墓は、いずれもスキタイ文化全盛期の前四〜三世紀に比定される大墓で、部分的に盗掘をうけながらも美術考古学的に貴重な資料を出土した点で、きわめて興味ある遺跡と考えられる。

メリトポリ古墳の調査

メリトポリ古墳と「五兄弟塚」

穴 沢 味 光

メリトポリはウクライナ共和国南部のザパロジエ州の都市でアゾフ海の北西岸よりやや内陸部に位置する。この都市では第二次大戦後の市街の拡張工事で多くのクルガンの墳丘が削平されたが、一九五四年春、メリトポリ駅前(1)のピエルボマイスカヤ街で、ある住宅の地主が敷地に井戸を掘り、地下の空洞を発見したことから建設工事で墳丘の大半を削平された古墳の墓室が市街の地下に残存していることがわかった。メリトポリ市郷土博物館はこの地下墳室の一部を発掘し、細い飾紐状の黄金冠、一九四箇の黄金小飾板、人の下顎骨などが検出された。調査はテレノジキン(2) (M. Терножин) の指導するウクライナ科学院考古学研究所の調査団に引き継がれ、この古墳の徹底的調査が行われた。市街地の中央という特殊な条件に加えて地盤が脆弱で崩壊の危険があり、地下墓室の内部を木の支柱で補強しつつ清掃したという。

メリトポリ古墳は有名なソローハ古墳(2)などの同時代のスキタイ古墳の多くにみられるように二つの重畳する墳丘からなり、埋葬

主体も二箇所に見えられた。まず古い方の埋葬から説明しよう。

第一の婦人の埋葬は現存の墳丘の北半に見えられた。これは元来周濶をめぐらし、独自の墳丘をもった塚で、墳頂の地下に本邦の地下式横穴に似た洞室墓(カタコンベ)を設けたものである。地下の主体は玄室とそれに通じる堅坑からなる。堅坑は長さ3.2m、巾2.2m、深さ(地平面下)6.5mでその底は南方の玄室に通じる。堅坑の底は砂で覆われ、残りは黒土で充されていた。玄室は長さ南北に10m、巾2.3mの廊下状に地山を掘りこんだ地下室で、崩壊が甚しいが天井の高さ2日、床面は地下「日」の深さにある。玄室入口と反対の端に二つの小耳室が掘りこまれ、右の耳室の平面は円く、左のは細長い。玄室の天井は崩壊し、床面には1.5mの厚さに崩壊土が堆積していた。

玄室は天井崩壊後に堅坑を通じて侵入してきた盗掘者に荒され、大きな貴重品は盗み去られていた。幸いにも盗掘者は地下の闇の中で床面の堆土を掘り返して副葬品を探索しなければならなかったため、埋葬の一部は攪乱を免れて原位置に残っていた。

床面の堆土は盗掘者によって掘り返され、被葬者の遺骨の一部やギリシャ都市製の黒色のキリックスや四人の婦人の頭を描いた赤絵式のレカニスの蓋、被葬者の衣服や装身具に縫い付けられていたおびたらしい黄金小飾板や装飾の断片、玉類などが無秩序に雑然と散乱して発見された。とくに興味あるのは大小の黄金や銀製の小飾板で三〇種類もあり、男女の顔、冠をかぶった髭の男、獅子の兜をいただいたアテナ女神の頭、臥獅子、猪の頭、昆虫、

パールメット、菊座^{ロゼット}、等々種類が豊富である。

被葬者は婦人で右の耳室内に木棺におさめて頭を入口に向けて伸展葬されていた。木棺は腐朽し、遺骨の一部と被葬者の衣服に縫い付けられていた黄金飾板の多くは盗掘者によって攪乱されて堆土内に散乱していたが、右胸廓、骨盤の一部と下肢骨が装身具をつけたままで原状を保っていた。まず両足の上には消失した長靴に縫い付けられてあったと思われる菊座文黄金飾板の列が並び、腰には帯に縫われたアテナと臥獅子文の黄金板が列をなし、胸には衣服の上半を飾った菊座、パールメット、獅子文の黄金板の群があり、右手に近く同様の黄金板と小菊座文黄板などの群が袖の縁の位置を示していた。この近くでは実に三五〇〇点にのぼる小黄金装飾が見出された。

右手首に近く黄金輪、冠、指輪があり、遺体の右側には骨板装飾を嵌め、金被せの木蓋をした木箱が潰れた状態で検出され、附近から寶石、多色ガラスの鳥型垂飾、化石鮫の歯(護符)があった。寶石は楕円形の扁平なガラス玉で飛翔する鳥の上に坐っている人物を彫っている。左側の耳室からは盗掘のため顕著な遺物は出土しなかった。

玄室の廊下状の部分の床面は全く盗掘されていず、遺物が現状のままに残っていた。両側の壁には各々五箇体のアンフォラが立てかけてあり、東壁の近くには台付きのスキタイ式青銅鏡が置かれていた。この銅鏡には煤が附着し、中には羊の骨がいれてあった。西壁に沿い、耳室に頭を向け、木板(木棺の遺残)の上に伸

展葬された殉死者の遺骨があった。殉死者の装身具は右耳室の女主人のそれに較べて貧弱で青銅と銀製の耳飾、鉄と青銅の腕輪と玉をつらねた首飾と腕輪をつけていた。玄室中央には木製の軛と潰れたアンフォラ一箇体があり、玄室入口には葬儀に使用されたらしい四輪車の鉄車具、青銅飾金具、腐朽した轆が発見された。

この墳墓の建設後、その封土と周湮とを包み覆う大きな墳丘が築かれ、その墳頂の地下に第二の墓室が設けられた。この第二の墳丘は中心部のみを残して削平されていたが、もと高さ約6mで海草と型にいけない日乾煉瓦とを交互に七層にわたって積上げて築いたものである。墳丘の中央に深さ12mの深い堅坑が穿たれている。堅坑の上部は平面が円形で下部は3.7m×2mの矩形を呈し、底部の西壁から短い羨道を介して玄室に通じている。堅坑は土と石灰岩板石で充たされ、玄門は石灰岩板石で閉塞されていた。玄室の床面は堅坑底より1m低く、平面は3m×2.5mの矩形で天井は崩壊していた。玄室の壁は平滑であった。

墳頂から盗掘坑が堅坑内に降り、墳頂から6mのところまで方向を変えて堅坑壁を貫通し、玄門の閉塞部を迂回して玄室に到達していた。この盗掘坑内から札子甲残欠や銅鏃や鹿角が見出された。

玄室内部は完全に盗掘され、床面には二体分の人骨と馬や羊の骨が無秩序に散乱し、若干の銅鏃や骨鏃、札子甲の破片、金製品などが見出されたのにすぎない。獣骨は青銅鍔におさめてあったらしく緑青が附着していた。玄室入口に近く四―五才の幼児が伸

展葬されていた。

玄室の北東壁に小さな掘込みがあり、この内部に盗掘者が全く気付かなかった副葬品の一部が遺存していた。その白眉は打出し細工のゴリユトス(弓矢筒)の黄金裝飾板で、有名なチエルトムルイク古墳の出土品⁽³⁾と完全に相同であり、アカンサスとグリフィンと女装してリコメーデース王の娘の間に匿われていたアキレウスがオデッセウスの計略で発見される物語をあらわす。このゴリユトスには矢が入れてあったらしく銅鏃七〇箇と木の矢柄の断片が伴出した。これに細い青銅帯とゴリユトスの帯に縫い付けられていたらしい正方形の黄金飾板五〇箇が発見された。この打出し模様は手に鏡を持ち玉座に坐った女神の前でスキタイ人が角坏⁽⁴⁾で何か飲んでいる光景をあらわしている。

堅坑から4B離れて墳丘封土内に馬坑が掘りこまれ、その中に馬具を装着したままの馬二頭が右を下にして上下に重ねて埋葬され、大きな板石で蓋をしてあった。馬葬は原状のまま、鉄の銜と鏃、大耳の獣の浮彫りの馬面、馬勒の裝飾などが認められ、下方の馬には胸繫飾りのついた鉄鎖が垂れ、表面に型押し青銅薄板を被せた革鞍の痕跡があった。

メリトポリ古墳の葬制はソローハ古墳⁽⁵⁾に酷似していて、副葬品にはチエルトムルイク古墳と同型ものが存在する。報告者は本墳の年代を前四―三世紀に比定している。出土のアンフォラなどギリシャ陶器の研究によって、より詳細な年代比定が可能である

うが、概報にはそれについては何も言及していない。

エリザヴェートヴスカヤ「五兄弟塚」の調査

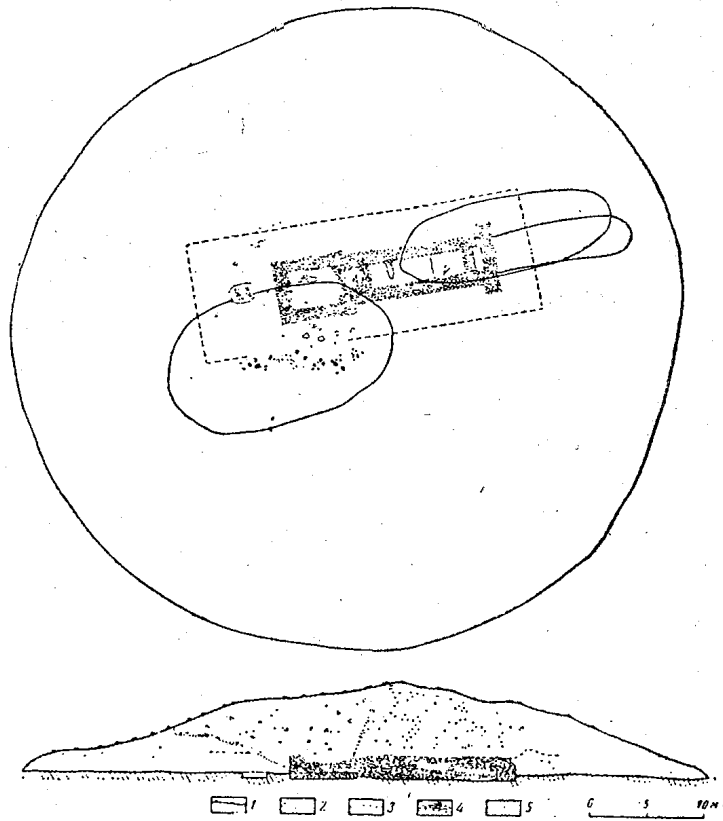
ドン河畔のロストフの近く、ドン河がアゾフ海に注ぐ三角州の上にあるエリザヴェートヴスクの古墳群は今世紀初頭のミレルやウーシャコフの発掘で学界に知られていたが、⁽⁶⁾「五兄弟塚」の古墳群もそれらの古墳から遠くない地点にある。この附近は春秋のドン河の増水期には水浸しになる低地で芦が茂り耕作には適しない。今日のガラデイーシチエ村のある微高地には二重の城壁をめぐらした集落址エリザヴェートヴスカヤ高^{ガラデイシチエ}城がある。これは一時タナイスの故址に擬定されたこともある有名な遺跡で、この高城を囲んで古墳群が分布している。「五兄弟塚」はその一群で、高城の東の 2km ドン河畔に近く南北に鎖状に並ぶ大小一六基の塚群よりなり、そのうち特に巨大な（直径 60-70m、高さ 7-12m）墳丘が五基あるので「五兄弟」《Пять братьев》の名がある。この古墳群のは一八七一年ヒツノフ（П. И. Хуцнов）によってそのうち六基が発掘されている。レンングラードに保存されているヒツノフの未公開の調査記録によると、彼は最大の第一二号墳には手をつけず、小型墳四基と大型墳二基（今日の第八号墳と第九号墳）を発掘したが、秋季の雨と労働力の不足とに祟られて十分な成果を得るに至らなかつたという。一つの大型墳（八号墳）では東側面からトレンチを穿って掘り進め、墳頂から 45 サージエン（9.6m）の深さまで石積み墓室に掘り当つたが馬骨と若干の

馬具の他に何も発見されず、彼はこの墳墓をすでに盗掘されたものと判断して発掘を打ち切つたという。

一九五四年よりソ連科学院考古学研究所の下ドン考古学調査団はシーロフ（B. П. Широб）を団長とし、ロストフ地区郷土博物館と提携してエリザヴェートヴスカヤの高城と古墳群の調査を開始し、一九五八年までにヒツノフの既掘墳を含め、「五兄弟塚」の小型墳七基を発掘した。ヒツノフの調査記録を検討したシーロフは、ヒツノフが八号墳で発掘したのは埋葬主体に陪葬された馬葬であり、彼の発掘は埋葬主体に到達しないで打ち切られた可能性があるので、八号墳を徹底的に再発掘してみる必要があるとの結論に達した。八号墳の発掘は一九五九年秋から秋の大雨とドン河の氾濫という悪条件をおかして進められ、ブルトーザーとスクレイパーを使用して巨大な封土を掘り崩し、内部主体を露出清掃した。シーロフの推定は適中し、ヒツノフは羨道の一部を発見したのみで調査を打ち切つたことが判明した。主体部は一部盗掘されていたがほぼ埋葬当時の状況をとどめていたのである。⁽⁷⁾

第八号墳は「五兄弟塚」の北から二番目の大型墳で、直径 62m、高さ 9m の巨大な円墳である。封土の裾には部分的に段があり、昔はここに石垣があつたという。封土の表面は黒土、下層は塩を含んだ砂で築成されている。内部主体は石室で、地平面を浅く掘り下げて砂岩塊と刻んだ草を混ぜた粘土で壁の基礎を築き、その上に石室の壁を構築したものである。これは東西に長軸をとり、

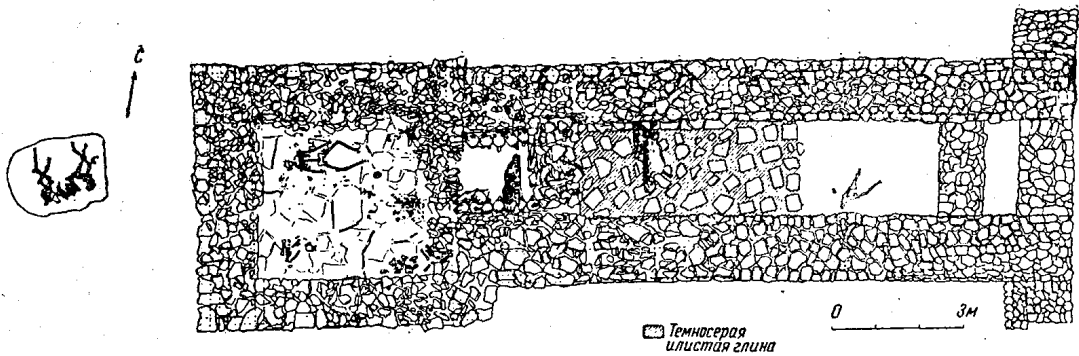
西端に6.5×6.4mの平面がほぼ正方形の玄室とその東壁に接する長さ1.74mの羨道から成る。玄室の入口には巾1.75mの通路が開いている。(第一図)石壁は厚さ約1.3m、高さは玄室で約1.75m、羨道で約2mで、大きめの砂岩板石を平らに積み上げ



第一図 エリザヴェートヴスカヤ「五兄弟塚」第八号墳の墳丘(左方の発掘坑は盗掘坑、右方の坑はヒツノフの発掘坑)

粘土を塗った内外の壁殻の間にやや小さな砂岩板石とワラ混りの粘土を詰めて築いたものである。石壁を補強するため、玄室羨道共に壁の内部に上下二つの平面に直径15-20cmの材木を一、三

メリトポリ古墳と「五兄弟塚」



第二図 同墳の主体部平面図(左方は馬坑)

列に塗り込めてあった。これらの材木はすでにその痕跡の空洞のみを残してすべて腐朽消失してしまっていた。玄室と羨道の天井は直径40-60cmの樫材の梁を横に並べて架構し、その上に芦、砂、粘土の層を敷いた上で封土を築成したものである。天井も石壁も木材の腐朽と封土の重量とによって崩壊していた。(第二図)

玄室の床面には不整形の砂岩板石が敷きつめられ、その上に南北に並んで二体の埋葬が認められた。南側の埋葬は玄室崩壊後に墳丘西南側より坑を穿ち、玄室西南壁を破って行われた盗掘によって荒掠され、初老男子の頭骨と下肢骨、ひどく破損したスキタイ式青銅

鍔、鉄投槍の穂先、鉄剣身、ガラス器破片、金製品の破片などが残っていたのに過ぎない。しかしメリトポリ古墳の場合と同様、盗掘以前に玄室の天井が崩壊していたことが幸いして玄室北半部は盗掘の厄を免れ、多くの遺物が残存していた。

玄室北部の床面の敷石上に西枕に軽く膝を曲げた伸展位で若い戦士の遺骨が横たわっていた。この戦士は黄金飾板と玉類を縫取った華麗な帽子と衣服を着用していたらしく、それらの装飾が原位置に残っていた。

まず頭部に帽子の装飾のパールメット文、菊座文、半球型の黄金板七八箇と赤ガラス玉が残り、頭骨の下には額飾りの黄金輪があった。頸には黄金の首輪をかけていて、首輪の両端は坐っている豹の彫刻になっている。この他に三つの黄金環よりなる首飾りがあり、環には金粒文のピラミッド型の装飾、ファイアンス、琥珀をつけたメダル、琥珀や紅玉髓や金銀の枠にはまった珊瑚玉などが垂飾として附着していた。胸、背、袖に相当する部位には衣服に縫い付けられた黄金型押し板が並んでいた。黄金板は正方形で鹿と格斗する蛮人を表わしたものと、三角型で粒文で装飾されたものがある。右肩の近くに螺旋形の黄金帯、左手に腕輪があり、左手の指には鹿を引裂くグリフィンを彫刻した楕円板をとりつけた指輪があった。大腿に近く革帯に銅の半環列を縫い付けた軍帯の痕跡があり、両足には長靴の先を飾った半球型黄金板が残っていた。

右肘に近くキリックスを模倣した銀環があり、遺体の左に少し

離れて銀の小壺があった。この壺の形態はクリオーバ古墳やチャストウイエ古墳出土の銀壺に似ているが素文でギリシア字母が刻まれているだけである。

この墳墓のもっとも重要な遺物は遺骸の左手に接して上下に重って発見されたゴリュトスとアキナケス形の剣である。剣は黄金薄板で包んだ柄と黄金打出しの装飾板をとりつけた木鞘を含め長さ58.2cmである。柄頭は楕円形で走る犬の意匠を打出し、握りには走る鹿、ハート形の鐔には相対するグリフィンを表現している。この黄金板の意匠は表裏同文で、表裏二つの黄金板を側面で重ね合せ錫で溶接している。これと同様の柄頭の剣はチエルトムルイクから出土しているという。剣鞘の飾板はグリフィンとスキタイ・ギリシヤ両軍の戦闘図をあらわした有名なチエルトムルイクの黄金剣鞘飾板と、組合せの剣の柄頭の意匠こそ異なれ完全に相同で、チエルトムルイクの剣鞘より保存が良好である。

ゴリュトスは木質で一〇八筋の矢をいれ、打出し黄金飾板を釘で取付けてある。この黄金飾板もまたチエルトムルイクおよび前述のメリトポリ古墳のゴリュトスの飾板と完全に相同である。これらの剣鞘とゴリュトスについて非常に興味深い観察がなされているが、それについては後で述べることにしよう。

被葬者の右膝の近くには鉄の轡、青銅の銜、銀鍍金鍍金の鳥翼状の頬当て金具、猛禽の頭をあらわした額飾りなどの馬具のセツトが見出された。

玄室の北壁に沿って三箇の陶製燭台、鉄短剣、鉄鏃、鉄鋒先が

あり、遺体の西北には簾の残欠があった。また遺体の周囲には多くの骨柄鉄小刀とおびただしい数のスキタイ式銅鉄鏃が群をなして置かれていた。

玄室入口に面して80cm四方の範囲内に総計一二七三箇にのぼる黄金製品の堆積があった。これは埋葬当時木櫃に収納されていた冠と衣裳とに縫い付けてあったものらしいが、木櫃は消滅し、石壁の崩壊で櫃の内容の原位置が乱されてしまったため復原は困難である。アカンサスの枝、グリフィンを彫った黄金装飾、アルテミス女神、グリフィン、菊座、獅子の頭などを打出した黄金飾板、アンフォラ形の垂飾を下げた黄金半環、球や壺の形をした玉などが認められた。

石壁には鉄鉤を打ちこんで衣類を掛けた痕跡が見出された。衣類は全く遺存しない。

これらの埋葬が行われた後、玄室入口は羨道部から砂岩塊と粘土によって閉鎖され、羨道の端に両壁に沿って一四ばかりのアンフォラが並んで立てかけられた。恐らく葡萄酒をいれたのであろう。アンフォラの形態と刻印から、そのうち九箇はヘラクレス製、五箇はシノペ製と考えられる。アンフォラの収納後羨道は再び砂岩片を積んで閉塞され、さらに羨門は二重に閉塞された。羨道内の他の部分では、かつてヒッソーノフが発見した馬骨が残っていたほか何も発見されなかった。また玄室西壁から2.15mのところには浅い馬坑があり、馬具を着装した馬一頭が横になって埋葬されていた。

メリトポリ古墳「と五兄弟塚」

「五兄弟塚」八号墳出土のアンフォラの刻印を詳細に検討したブラシンスキー(M. B. Брашнскнй)はその年代を前四世紀の最後の二五年間に比定している。⁽⁹⁾この年代比定は八号墳出土の剣鞘とギリユトスがチエルトムルイクと同型であること、黄金飾板の中にソローハ出土のものと同型のもがあることによっても裏付けられる。

「五兄弟塚」の被葬者の生前の居住地であったと推定されるエリザヴェートウスカヤ高城とその周囲の古墳群の発掘はブラシンスキーら下ドン考古学調査団によって行われ、現在も継統中である。⁽¹⁰⁾高城内の発掘では編物に粘土を塗って壁にした住居址や巨大な堅穴建築址が検出され、地中海、黒海沿岸のギリシャ植民市からの輸入陶器の破片やテラコッタの女神像などが出土した。特に注目すべきことには、この遺跡には多量の魚骨魚鱗が層をなして堆積していて、ピラミット形土錘が発見されている。周知の如く塩漬の魚は古代黒海北岸の主要輸出品の一方で、農耕に適さないドン河三角州の首長に「五兄弟塚」の出土品にみられるような富の蓄積をもたらしたのは漁業と、ギリシャ植民市と内陸住民との中継貿易であろうと想像されている。

ギリユトスと剣鞘の諸問題

以上紹介したスキタイ時代の二古墳の発掘は、十分に訓練された考古学者によって行われ、精密に記録されたので、調査技術が

杜撰で主体内の遺物の配置図すらしばしば正確に記録しなかったような帝政ロシア時代のスキタイ墳墓調査の欠を補う知見を我々に提供している。

残念ながら両墳共に正式報告が未刊行であり、出土遺物の大半はその写真が公表されていない。したがってその副葬品―特に莫大な数量の打出し黄金飾枚について既掘の資料との間に比較研究を行うことが出来ない。ここではそのもつとも顕著な遺物であるゴリュトスと劍鞘の黄金飾板について説明された新事実を述べるに止めたい。

異ったスキタイ墳墓からしばしば全く同型の貴金属製品が出土する事実は、すでに今世紀初頭から知られていて、このような製品が量産され、商品として販売されたことの一つの証拠とされていた。⁽¹¹⁾このような現象は特に黄金飾板に顕著に認められているが、その他にもチエルトムルク出土のゴリュトスの同型品がウクライナ内陸部のキエフ州イリンツイ古墳から出土しており、またチエルトムルクの黄金劍鞘に類似した伝ニコポリ附近出土の劍鞘がニューヨークのメトロポリタン美術館に収蔵されていることもよく知られていた。メリトポリ古墳と「五兄弟塚」の発掘は新たにチエルトムルク型のゴリュトス二例と劍鞘一例を追加したばかりでなく、このような黄金飾板の解釈と製作法について新知見を提供した。メリトポリ古墳のゴリュトスについて詳細な記述が未だ公表されていないのは遺憾であるが、「五兄弟塚」のゴリュトスと劍鞘について発掘者が興味深い観察を行つてゐる。

チエルトムイルク型のゴリュトスの製作法について、かつてフアルマコフスキー (B. B. Фармаковский) やヴェセロウスキー (H. N. Веселовский) らはゴリュトスの黄金飾板は母型となる浮彫木型の上で黄金板を植起することにより製作され、母型の木型は黄金板の変形を防ぐため黄金板にとりつけたままでゴリュトス本体にとりつけられたと想像した。ところが「五兄弟塚」のゴリュトスや劍鞘の裏面にはこのような木型の存在した形跡は全く認められず、その代りゴリュトスの本体と黄金板との間の空隙には一見黄色状の黄色物質が充填されていた。⁽¹³⁾スペクトル分析により、この物質は膠を混じた石膏であることが判明した。すなわち黄金飾板は打ち出し製作後、原型からとりはずして裏面に石膏のペーस्टを塗って補強された上でゴリュトスや劍鞘の木質本体に着装されたものと考えられるに至った。

この観察によつてゴリュトスや劍鞘の同型品の製作方法に対する見解が変った。ヴェセロウスキーはチエルトムイルク型のゴリュトスは原型からコンパスを使って木型の写しを作り、その上で黄金板を打ち出すことにより同型品が製作されたと推測した。しかしチエルトムイルクと「五兄弟塚」のゴリュトスと劍鞘は細部まで完全に相同であり、かつ双眼拡大鏡で飾板の表裏を仔細に観察すると、打出された模様が飾板の表面より裏面の方で明瞭であることがわかった。この事実は両墳のゴリュトスや劍鞘の飾板が全く同一の陽型の上で打ち出して製作されたことを意味する。この陽型は恐らく蠟型を使って鑄造された青銅製であったと推測さ

れる。何故なら柔軟な黄金板の裏面には金属母型表面の亀裂や粗造面や凹凸が写し取られているからである。蠟型の表面を厚い布で磨いた平行な条痕も認められている。

「五兄弟塚」のゴリュトスと剣鞘の飾板は全く同一組成の琥珀金 (Au. 60.89%, Ag 36.61%, Cu 0.92%, Fe 0.60%) から成るにもかかわらず色調を異にし、剣鞘は蒼みを帯びた黄金色、ゴリュトスの表面は豊かな黄金色、裏面は乳白色を帯びた金色を呈している。これは製作者が飾板の地金を純金にみせるため金鍍金を表面に行ったためであろう⁽¹⁴⁾。

このようにチエルトムルク型のゴリュトスや剣鞘は (1) 蠟型で青銅母型の鑄造、(2) 母型を用いて黄金板の打ち出し、(3) 黄金飾板表面の鍍金、(4) ゴリュトスや剣鞘本体への着装という方法で製作されていたことが推定されるに至った。つまりこれらの製品はスキタイ墳墓から多量に出土する小黄金飾板などと基本的に同じ性格のもので、安直な方法で量産され、黒海北岸の諸部族の間に広く販布された商品であることが明らかにされたのである。チエルトムルク型のゴリュトスだけで四例も出土していること、墳墓に副葬された器物は実際に存在していた器物の決して全部ではなかったであろうこと、またスキタイの大型墳の大半は盗掘されて内容を失っていること、などを考慮すれば、この種の大型黄金製品が当時如何に多数製作されたか想像に難くない。

また保存良好な「五兄弟塚」の剣鞘の意匠の拡大鏡による観察は従来のチエルトムルクの剣鞘の意匠の解釈を一部修正してい

メリトポリ古墳と「五兄弟塚」

る。この剣鞘の主題はギリシャ軍とスキタイ軍との戦斗図であり、その右端鞘尻に近い鞘の狭窄部には負傷して地上に半身を起している人物と、それに手を延べている人物の二組が表現されている。従来の解釈では、この一組は負傷したギリシャ兵を捕えるスキタイ兵とされていたが、仔細な観察の結果、この一組の人物は実は二人のギリシャ兵であり、左側の兜をかぶった兵士が負傷した戦友の大腿と下腿に手をあて、戦友の膝に突き刺った矢柄を歯でくわえて引き抜いている場面であることが判明した。スキタイ兵が負傷した戦友を手当てする意匠は有名なクリ・オーバ出土の銀壺⁽¹⁵⁾に認められるが、「五兄弟塚」の剣鞘の新知見はこれに新しい類似例を加えたことになる。

これらの黄金製品の製作の中心については、周知の如く、黒海沿岸のギリシャ諸都市⁽¹⁶⁾にポスポロス王国をその工場の所在地に比定する説が有力であり、「五兄弟塚」の発掘者もその意見を支持している。現在までに発見されたチエルトムルク型の黄金製品の地理的分布もこの説に有利であるように考えられる。ソ連の研究者の中にはマンツェービッチ (A. N. Mantshevich) のようにこの種の器物がトラキア工匠によって製作されたことを主張する一派もある⁽¹⁶⁾。しかし現在のところ彼の主張には十分な説得力が欠けているように考えられる。

メリトポリ、「五兄弟塚」の二古墳の発掘の成果について公表された資料は以上の通りである。チエルトムルク、ソローハの

二大スキタイ墳墓と殆んど同時代のこの両墳の出土品は、その他にも多くの問題を蔵しているであろう。全出土遺物を公表した正式発掘報告の公判を期待して止まない。

(一九七〇、四、八)

註

(1) 本稿のメリトポリ古墳に関する記述と挿図はすべて左の概報に拠ったものである

Е. Ф. Покробокая: Мелитопольский скифский курган, Вестник Древней Истории, 1955, № 2. Ст. 191-199.

(2) M. I. Rostovszeff: Iranians and Greeks in South Russia, Oxford, 1925. (邦訳本、坪井良平、榎本亀次郎訳「古代の南露西亜」桑名文屋堂 一九四四) pp. 146-149. (本書の頁数は邦訳本のそれを示す。)

(3) T. H. Minns: Scythians and Greeks, Cambridge, 1913. pp. 164-165, 284-287.

(4) これと同意匠の黄金飾板はチェルトムルク及びクリオーパよりの出土している。

Minns 前掲書, p. 158, Fig. 45. および

「スキタイとシルクロード美術展」日本経済新聞社 1969 第三〇頁。

筆者はメリトポリ出土の飾板はこの前記の両墳出土の飾板の同型品ではないかと推測しているが、パプロブスカヤはそれについては何も言及せず、遺物も図示されていない。

(5) Rostovszeff 前掲書 (邦訳本) pp. 146-149.

(6) 特に一九〇一年ウーシヤコフ (И. И. Ушаков) が発掘し、現在エルミタージュ美術館に所蔵されている黄金剣鞘飾板は有名で、その年代について種々の議論が行われた。この古墳は一九六〇年に下ドン考古学調査団により再発掘され、残存した陶器破片から、その年代が前四世紀前半であることが判明した。

В. П. Шидлов: Ушаковский курган, Советская Археология 1966, № 2, стр. 174-190.

(7) 「五兄弟塚」に関連した記述と挿図はすべて左の文献に拠った。

В. П. Шидлов: Раскопки Елизаветовского могильника в 1959г., Советская Археология 1961, № 1, стр. 150-168.

И. В. Брашницкий: Сокровища скифских царей, стр. 113-121, М. 1967.

(8) Minns. 前掲書 pp. 164-165, 284-287.

(9) И. В. Брашницкий: Амфоры из раскопок Елизаветовского могильника, Советская Археология 1961, № 3, стр. 178-186.

(10) エリザヴェートヴスカヤ高城とその周辺の小古墳の調査に關しては左記の文献を参照。

И. В. Брашницкий, и. А. И. Деменко: Исследования Елизаветовского могильника в 1966г., Краткие сообщения института

Археологи АНСССР. Вып 116. стр. 111-117, 1969.

Я. В. Доманский: Раскопки Елизаветовского городища и курганов на нижнем Дону сб. Археологические открытия 1965. Г. стр. 108-110, М., 1966.

И. В. Брагинский, и Я. В. Доманский: Исследования Елизаветовского городища и курганного могильника, сб. Археологические открытия 1966г. стр. 80-83. М., 1967.

И. В. Брагинский: Работы Южнодонской экспедиции, сб. Археологические открытия 1967г. стр. 88-89, М., 1968.

И. В. Брагинский: Раскопки на нижнем Дону, сб. Археологические открытия 1968 г. стр. 111-112. М., 1969.

(11) Rostovzeit 前掲書 (邦訳本) pp. 140-141.

(12) Minns 前掲書 p. 287.

(13) チェルトムライクの発掘者ザベリン (М. Е. Забелин) も同様の事実を記載しているところ。 (Шидков. 1961 参照)

(14) チェルトムライクのゴリユトスの金質に比較するとイリンツイ古墳出土のゴリユトスの金質が劣ることが報告されている。(註(12)参照)これも鍍金による外観上の相異である可能性も考えられる。

(15) Minns 前掲書 pp. 200-201. Fig. 92-94.

(16) Rostovzeit 前掲書 (邦訳本) pp. 161-163.

(17) 角田文衛「チェルトムライクの壺」 Museum, 159, pp. 7-

メリトポリ古墳と「五兄弟塚」

13, 1964.

メンツェーヴィッチはメトロポリタン美術館所蔵の「伝ニロポリ近郊出土」の黄金劍鞘が、第一次大戦前イスタンブールのロシア考古学研究所に売り込みに持ちこまれた事実から、この劍鞘の真の土地がイスタンブール近くのトラキア墳墓であった可能性があると述べている。

А. И. Мазебич: Парадный меч из кургана Солоха. сб. Древние Факильцы в северном Причерноморье. стр. 96-118. М., 1969.

〈付記〉

ここに紹介した二古墳の出土遺物の写真は、原文献の挿図が鮮明でないため、ここに掲載することができなかった。チェルトムライク、ソローハ、クリオーバ古墳の出土品のきわめて鮮明な写真は、M. I. Artamonov: Treasures from Scythian Tombs, Thames & Hudson. London. 1969. を参照されたい。